

環境と調和した活気にあふれるまちづくり

01 安心安全な環境を未来の子ども達に

東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故により、放射線の影響に対する住民の皆さまに不安が広がっています。住民の皆さまの安心安全な環境を確保し、特に子どもたちへの健康に対する不安を少しでも

解消するため、昨年11月下旬に町の対応方針を定めました。子どもたちが利用する頻度の高い小中学校、保育施設などの公共施設を優先して放射線詳細測定を実施し、周辺より高い放射線量が測定された場合には低減対策を進めてきました。昨年12月には、農家が販売する農産物の安全性を確認し、風評被害を防ぐため、農産物放射線影響自主検査の費用に対して

一部補助を行う対策事業を創設しました。また、保育所給食と小中学校給食で使用する食材の放射性物質の検査を開始いたしました。引き続き、住民の皆さまの安心安全な環境を確保するため放射線対策事業を実施してまいります。

次に、本町のごみ焼却場は平成14年度に稼働停止してから、ふじみ野市との共同処理事業を行っています。平成28年度の稼働を目指している広域ごみ処理施設建設事業は、事業者選定、地域整備事業、建設用地取得等を実施してまいります。

新エネルギー導入の促進及び温室効果ガスの排出量の削減を図ることを目的に、住宅用太陽光発電システム設置補助事業を始めます。

02 三芳町の野菜はちょっと違う。若さでチャレンジ!

本町の農業は、ほうれん草、かぶ、小松菜、狭山茶、富の川越いもなど高品質な野菜が生産

され県内有数の農業生産地です。首都近郊という立地条件を活かし都市型農業へ移行し、農業経営も転換しつつあります。今年度は、新たに2つの新規事業を開始し、三芳町野菜のブランド化を進め、産地間競争に勝ち抜ける「農業の町・三芳」を目指してまいります。

まず、農商工連携6次産業チャレンジ支援事業です。

農業者の生産性の向上や地域の活性化を図るため、町の農産物を活用した加工品の研究開発や新たなビジネスの展開など6次産業化にチャレンジし、町のモデルとなる取り組みに対して支援を行ってまいります。

次に、みよし野菜ブランド化推進支援事業です。中核的担い手農家の意欲ある若い農業者により(仮)「みよし野菜ブラン

文化、地域の産業の基盤を活かした企業誘致など特色ある経済活性化事業を展開し、地域経済の活性化を進めてまいります。西の玄関口構想として進めていたスマートICは、平成20年8月の地区協議会以降、財政状況やフル化に対する賛否の声により、検討が中止したままになっています。スマートICの

フル化(車種制限も含む)は、地域経済の活性化、観光施策の推進、三富の自然や環境の保全等広い視野から本町の将来のビジョンの中で検討していかなくてはなりません。今年度は、庁舎内に検討チームを再編し、今までの経過を検証し、関係機関に検討再開を周知し、方向性を

03 新たな時代への転換期に小さくとも輝く町に

本町は、数多くの観光資源に恵まれています。これらの観光資源を発掘・活用し「住んでよし訪れてよし」の町を目指しています。

現在、政策研究所の観光の町検討プロジェクトチームで観光のまちづくりについて研究をすすめています。政策提言で良いものは即事業化してまいります。

今年度は、政策研究所で(仮)「日本の里100選三富新田再生」プロジェクトチームを立ち上げ、懸案となっている近世開拓史料館跡地利用も含め、世界に誇れる文化、農業遺産である三富新田の再生に向けて研究します。

昨年好評であった、三富新田での世界一の「いも掘り大会」も実施し、三富新田や「三芳町」の野菜を広くPRしてまいります。

次に、地域経済の活性化を目的に三芳町地域経済活性化懇談会を設置します。本町の歴史や



むすびに



厳しい経済状況の中で、自治体を取り巻く環境は大変厳しいものがあります。各自治体とも地域間競争に勝ち抜くために、必死になって知恵を絞り、身を削り、汗を流しています。

しかし、時代の大きな流れの中で、ここ数年が「三芳町」の命運を決する正念場であるように思えてなりません。

本町では、協働のまちづくりが実を結び始め、政策研究所も改革のエンジンとして始動し始めました。

今、ここで、私たちは「三芳町」の未来をしっかりと見据え、住民の皆さまと英知を結集し、確かな方向に舵を切っていく時だと考えます。

一日一日に、一つひとつの施策の積み重ねに「三芳町」の命運がかかっていると肝に銘じ、大勢の皆さま方の声を真摯に受け止め、町政発展のために尽力してまいります。

